心に響く 校長講話 ▷66◁

永池 啓子 横浜市立白幡小学校校長

震災に学ぶ―ある男の子の話

道徳教育は、学校の教育活動全体を通じて行い、充実させていきたい。講話はそのきっかけとして、再度、学校全体でその取り組みを見直し、すぐに行動できることを目指して改善していく良い機会となります。

例えば、「あいさつ」（あかるく・いつも・さきに・つづけて）「黙動」（掃除）「笑いの力」等々、絵本や紙芝居などを用いたり、昔話や民話を取り上げたり、ふさわしい題材はたくさんあります。また、自然災害などの実際に起こった体験の中で、価値深い行動を取り上げて考えさせていくことも大切にしたい視点の一つです。

震災に学ぶ「ある男の子の話」について紹介します。その「男の子」は、ベトナムに駐在されていた商社で働く方からのお話です。

東日本大震災の直後、炊き出しの現場を取材していたベトナムの新聞記者が、自分のポケットに入れていたバナナをふと落とした時、それを小さな男の子が拾ってくれたそうです。

皆さんも覚えているように、3・11の東日本大震災の直後は、被災地は雪が舞っていました。その中のことです。長い炊き出しの行列を見て、記者はバナナを男の子にあげようとしました。しかし、男の子は「自分だけがもらえません」と言って頭を下げ、行列に戻っていったのだそうです。記者はひどく感動し、帰国後、ベトナムの新聞にこのことを載せました。すると、「日本は子どもに至るまで、なぜ道徳観が高いのか」とベトナムの間で大きな反響が広がり、日本への支援の申し入れが相次いだそうです。小さな子どもであっても、「このような日本人がいる限り、日本の力は決して衰えることはない」というお話でした。

この小さな男の子の取った行動が、世界の人の心を動かしたのです。男の子の行動はこの時だけのことではなかったでしょう。「マナーを守る。感謝を忘れない」。普段皆さんが当たり前のこととして大切にしていることが、災害に遭うという大変厳しい状況の中にあっても、人々が支え合い助け合う大きな力となるのです。